B—33　衣服類のクリーニング実態に関する調査

京都女大家政　北田総雄　○太田光子
近大附豊岡女高　藤原春代子

目的　昭和48年末の石油ショックに始まった狂乱物価や物不足パニックによって，10年余り続いた高度成長時代は終り，いま低成長時代を迎えている。これに伴って，私たちの消費生活も大きく変わり，今までの大量消費・使い捨てから節約へと，生活意識に変化が現われている。本調査は家庭におけるクリーニングの実態を通して，こうした消費者の意識を調べ，あわせて今後の衣生活の資料を得るのが目的である。

方法　昭和50年7月～10月にかけて京阪神を中心とした近畿都市圏，および北近畿の兵庫県・京都府郡部の2地域に，作成した質問紙約1300枚を配布して調査した。調査項目は①品名　②材質　③仕立て方法　④洗たく方法（クリーニング店の利用度）　⑤クリーニング店に出す理由　⑥クリーニング店に出す回数　の計6項目である。紳士用品・婦人用品各11品目，および家庭用品4品目について上記②～⑥を調査し，それらの相互関係を検討した。なお各11品目の衣服類は必要に応じて着装位置別に外衣，中衣にまとめて検討した。

結果　材質は，外衣は毛と混紡が多く，中衣はむしろ混紡が多い。特に婦人用品は化繊混紡製品の普及率が高い。仕立て方法（既製服，その他）は各品名・各材質による差は明らかではなかった。次にクリーニング店の利用度は全般に高く，外衣では材質や仕立て方法の違いよりも衣服の形態によることが多いが，中衣は材質による傾向がある。クリーニングに出す理由は，品質低下の抑制以外に価値観による理由がみられた。洗たく周期は外衣が長く年に1～2回，中衣はそれより短かく年に3～6回である。